



日本植物病理学会ニュース 第100号

(2022年11月)

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 関東部会開催報告

令和4年度日本植物病理学会関東部会は、一昨年度、昨年度に引続き新型コロナウイルス感染防止対策のため、関東部会プラットフォームを使用したWEB開催とし、特別講演・一般講演ともにオンデマンド形式の動画配信とした。9月15、16日の開催期間中、コアタイムでは掲示板を使用して質疑応答を行い、さらに9月24日までは参加者全員は自由に動画を視聴できた。参加者は合計147名で、その内訳は一般会員が93名、学生会員が39名、非会員が15名であった。

特別講演として、船曳理恵氏（独立行政法人製品評価技術基盤機構）が「生物多様性条約に則った微生物の輸入及び日本産微生物の海外利用について」について、国際的な取り決めによる微生物資源の取り扱いについてご講演いただいた。また、一般講演には合計29題のエントリーがあり、その内訳は菌類病関連6題、ウイルス・ウィロイド病関連10題、細菌・ファイトプラズマ病関連4題、植物保護・診断関連9題であった。本年度は座長を例年より多くの先生方をお願いして講演発表に対する質疑応答に加わっていただいた。活発なやり取りが行われる講演が随所に見られ、時間制限のないオンデマンド形式の質疑応答の良い点も見出された。学生優秀発表賞には、今年度は13名のエントリーがあり、大澤武留さん（信州大学 農学部 農学生命科学科 微生物植物相互作用学研究室）、田村梨紗さん（東京農工大学大学院 農学府 遺伝子工学研究室）、井藤碧更さん（東京農工大学大学院 農学府 細胞分子生物学研究室）の3名が受賞された。

また、16日にはZOOMを介した同時双方向型のオンライン形式で「第17回日本植物病理学会関東部会若手の会」が、坂田七海氏（筑波大学 植物寄生菌学研究室）、作田康平氏（東京農工大学大学院 細胞分子生物学研究室）、米原克磨氏（東京大学大学院 理研）を世話人として開催された。

演題は鵜家綾香氏（国際農林水産業研究センター 生物資源・利用領域）による「農学×国際協力の分野でキャリアパスを築く」、晝間敬氏（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系）による「微生物の多彩かつ連続的な植物感染戦略を決める遺伝基盤の理解へ」、石井英夫氏（筑波大学生命環境系）による「薬剤耐性菌と向き合って」であり、参加者は51名であった。参加者からは、若い人のやる気を高める企画との好評を得て、本会開催の趣旨が達成されていることが伺われた。

常態化したオンライン開催は今年までとして、来年こそは研究成果を一同に介したところで発表し、さらに情報交換会ができるように状況が改善されることを願っている。来年も同時期に開催を予定していますので、ぜひご出席ください。（渡辺京子）

(2) 関西部会開催報告

令和4年度日本植物病理学会関西部会は、9月21日（水）午前10時30分から9月22日（木）午後0時までの2日間、高知会館にて対面形式で開催された。当初は高知大学朝倉キャンパスで開催を予定していたが、よんどころない事由により高知会館での開催に変更した。新型コロナウイルス禍かつ台風14号襲来にもかかわらず、予定通りに3年ぶりの対面形式の関西部会を行うことができた。参加・講演の申し込みを日本旅行に依頼し、当日受付を行わず、希望者（22名）以外には講演要旨集をメールによるpdf配布としたが、参加登録者数212名／発表数89題であり、新型コロナウイルス禍前の関西部会と同様に盛会であった。会員の皆様が対面学会を待ち焦がれていたことがわかった。9月21日（水）午前9時から役員会を開催し、午前10時30分から総会を行い、全ての議案が承認された。次期部会長には岡山大学の鈴木信弘氏が選出された。また、次年度の部会は、近畿大学の川崎努氏を委員長として、近畿大学農学部で開催されることが決定した。総会終了後に、曳地による「植物病理学にパラダイムシフトを

ー青枯病菌の細菌密度依存遺伝子発現制御系クオラムセンシング」の部会長講演を行った。一般講演は、菌類病、細菌病・ファイトプラズマ病、ウイルス病・ウイロイド病、植物保護のカテゴリーに分類され、それぞれのカテゴリーの講演数は、菌類病 42 題、細菌病・ファイトプラズマ病 20 題、ウイルス病・ウイロイド病 11 題、植物保護 16 題であった。久しぶりの対面の学会であり、はじめての対面講演の講演者もおられたが、積極的な質疑応答が行われるとともに、座長の方々の適切な運営のおかげで、パンクチュアルながらも活気のある部会となった。初日の講演終了後に、ロビーで積極的な討議を行った方々が、さらに旧知の仲を確かめ合った方々が、三々五々、高知の街に向かっておられた。今回の部会は、部会長と開催地委員長を曳地が兼ねたこともあり、運営責任者としてご尽力いただいた高知大学 大西浩平氏をはじめ、高知大学、高知県農業技術センターおよび日本植物防疫協会高知試験場の関係各位のご尽力とご協力によって、無事成功裏に開催できた。ここに記して、心より厚く御礼申し上げます。（曳地康史）

2. 第 16 回植物病害診断教育プログラム

第 16 回植物病害診断教育プログラムは、令和 4 年 8 月 22 日から 26 日まで、秋田県立大学生物資源科学部において開講しました。令和 2 年は ACPP の開催（コロナによる中止）も予定されていたため令和 3 年度に開催の予定で準備をしてきましたが、コロナによって中止を余儀なくされました。令和 4 年もコロナの影響を受ける中、30 名の定員で 6 月 20 日に受付を開始したところ、3 年ぶりの開催ということもあり、同日の 12 時には定員に達してしまいました。定員に達したときに複数の申込があったため、急遽 35 人に増員しました。受講できなかった方におかれましては、次年度以降の受講をお願いします（来年度は富山県の守川俊幸氏が代表となり、岐阜大学で開催される予定）。今回のプログラムには沖縄県をはじめとした遠方からも参加があり、学会員は 27 名、非会員は 8 名でした。そのうち大学院生が 8 名、国・県の研究機関等から 13 名、種苗・農薬・資材会社などの民間企業等から 14 名が参加し、受講者の多くが若手の研究者でした。プログラムの初日には参加者全員に新型コロナウイルスに対する抗原検査を行い、陰性確認を行うとともに、毎日、会場入室前に検温と手指消毒を行ってもらい、休憩時間には換気を行うなどコロナ対策に注意を図りながらの開催となりました。

初日には実行委員会を代表して藤が歓迎の挨拶をさせていただいた後、北海道大学 増田 税学会長のご挨拶を頂きました。その後、弘前大学 農学生命科学部の田中和明氏

から「顕微鏡観察・写真撮影と菌の単孢子分離」というタイトルで、顕微鏡の正しい使い方から始まり、プレパラートを作製する上でのポイント、孢子の隔壁を明確にする方法、孢子の脱色方法など教科書ではなかなか学ぶことができない、綺麗な顕微鏡画像の取得方法についての実習が行われました。受講生の皆さんは、スマートフォンを接眼レンズに近づけて撮影し、作製したプレパラートの画像を記録として残していたのが印象的でした。

初日の後半と 2 日目の午前中は、青森県産業技術センター野菜研究所の近藤 亨氏により「野菜・花卉類の病害診断」と題して実習を行って頂きました。近藤氏が青森県より自家用車で持ち込んでいただいた病害サンプルを使って、それぞれの病害における病徴、菌叢、孢子形態等の特徴を観察しながら、診断の手順や識別のポイントを学びました。

2 日目の午後は、藤が「植物ウイルス同定の基礎」と題して *Chenopodium quinoa* を用いたキュウリモザイクウイルスの汁液接種法による分離を実習した後、モザイク症状を呈したズッキーニを材料に、キットやフェノール等の劇物を使用しなくてもゲノム抽出が可能な PEX 法でゲノムを抽出、RT-PCR により感染ウイルスを特定する実習を行いました。休憩時間には電子顕微鏡によるウイルス観察のデモンストレーションも行われました。ほとんどの受講生が電子顕微鏡でウイルスを観察することがなかったため、短い時間ではあったが印象に残ったようです。

3 日目の午前は、藤が「水稻病害の診断（育苗期病害の診断）」と題して、あらかじめ準備した育苗期病害を実際に観察しながら、その特徴についての講義と実習が行われました。受講生は、罹病株に形成した孢子の観察やもみ枯細菌病と苗立枯細菌病との違い、各種病原菌による土壌病害の特徴を比較しながら学んでいきました。



教育プログラムでの実習の様子

3日目の午後から4日目の午前は、農研機構東北農業研究センターの遠 瑞枝氏により「植物病原細菌同定の基礎」と題した実習が行われました。罹病植物からの病原細菌の分離方法を学んだ後、同定のための基本的な細菌学的性状（グラム反応、糖酸化・発酵試験、ジャガイモ腐敗試験、タバコ過敏感反応、アルギニンヒドラーゼ活性、オキシダーゼ活性）について、それぞれに渡された6種の菌株を識別する形式で実習が行われました。特にジャガイモ腐敗試験での菌株による腐敗能の違い、タバコの過敏感反応では病原菌がどうかといった植物の反応を体験できたことは受講生に有益だったようです。

4日目の午後は、秋田県鹿角地域振興局農林部 佐藤 裕氏により「寒冷地果樹病害の診断」と題した実習が行われました。実習ではリンゴ（葉、果実、根）、ナシ（葉）、ブドウ（葉）に発生した糸状菌病害を材料として、それぞれの病害の特徴と顕微鏡による病徴観察、病原菌の胞子や菌糸束の観察が行われました。

最終日5日目は、秋田県立大学生物資源科学部 戸田 武氏により「土壌伝染性病害による症状と病原菌の観察」と題して、午前中はアブラナ科植物根こぶ病やアスパラガス疫病などの病害の肉眼観察および根に形成された耐久器官の顕微鏡観察、午後は *Fusarium* 属菌の分生子や *Pythium* 属菌の卵胞子の顕微鏡観察と *Rhizoctonia* 属菌が起す菌糸融合の観察などの実習が行われました。

5日目の最後は、2日目の午後に接種した *C. quinoa* の症状を観察した後、形成した局部病斑からの単病斑分離の実習と RT-PCR による検査結果の紹介が行われました。そうして、全プログラムが無事終了し、藤から受講生全員に修了証を授与しました。

コロナ禍ということで情報交換会は実施できませんでしたが、休憩時間には受講生同士や講師の方々と情報交換が

積極的に行われていました。終了後の Google フォームを使ったアンケートでは、すべての講義について多くの受講生の方から「知らない技術を習得できた」と回答を頂きました。また、実際に罹病植物や病原菌を使って実践的に学ぶことができたことが良かったと多くの方から回答を頂きました。今回受講された方の多くは、職場の上司や指導教員から参加を勧められたとのことで、それが今回、若手研究者が多く参加された要因の一つのようです。受講された方におかれましては、交通の便が悪く最寄りの駅から30分の坂道を毎日通って頂いたことに感謝申し上げます。また今回協力していただいた講師の方々には、ここに記して感謝申し上げます。（藤 晋一）

3. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第56回感染生理談話会

令和4年度の植物感染生理談話会を東北大学青葉山新キャンパス（仙台市）において9月5日～7日の日程で開催しました。SARS-CoV-2の流行により令和2年度は延期、令和3年度はオンライン開催であったため実に3年ぶりに対面形式の開催となりました。学生27名、一般40名の計67名の参加者が集まり、対面形式ならではの熱い議論が交わされる会となりました（写真1）。ご参加いただいたみなさまにお礼申し上げます。

今回のテーマは「植物・微生物間相互作用の進化」としました。現在我々が研究対象としている複雑な植物・微生物間相互作用も、そこに至った過程を想像することにより、



写真1 講演会場（上段）とポスター会場（下段）の様子。久々の対面開催に議論が大いに盛り上がりました。



参加者全員で記念撮影

思いのほか単純な原理に基づく進化の結果として必然性をもって読み解けるのではないか、という意図です。一日目は瀬尾茂美先生、橋本将典先生、佐藤有希代先生がそれぞれ天然からの生理活性物質の探索、根圏マイクロビオータと栄養の関係、多様な糸状菌ウイルスの生き様についての話題をご紹介くださいました。特別講演では東北大学の白川仁先生にビタミン K の健康機能性についてお話しいただきました。いずれも役者が多く非常に複雑な話題でしたが、なぜそのような複雑なことになっているのか、原点に立ち返って考えるとさらにワクワクする内容でした。二日目は中屋敷均先生、深田史美先生、松井英義先生、小松健先生がそれぞれ糸状菌ゲノムの水平移行とエビジェネティック制御、病原糸状菌と宿主植物のコミュニケーションに関する新しい可能性、新手法による細菌エフェクター標的因子の探索、ウイルス複製タンパク質の機能に重要な α ヘリックスについてお話しいただきました。ゲノムスケールからアミノ酸残基のスケールまで一気に駆け下りる楽しい時間になりました。特別講演では国立病院機構仙台医療センターの西村秀一先生がヒトのウイルスの空気感染について話題提供くださいました。途中で宇宙や大気中のウイルスの話まで飛び出してきて、ジェットコースターのような一日となりました。三日目は植物ウイルスに縁の深い先生方にお話しいただきました。竹下稔先生は BTH が持続的な抵抗性を誘導する仕組みについて、八重樫元先生はリンゴのウイルス研究系の開発と応用利用についてご紹介くださいました。藤崎恒喜先生は岩手県特産であるリンドウの糸状菌病・ウイルス病に関する基礎研究について、石橋和大先生は植物ウイルスベクターによるゲノム編集と、それを利用したウイルス抵抗性付与についてお話しいただきました。いずれも各先生ならではの洞察と示唆に富む内容で大変勉強になるものでした。貴重な講演をしてくださった講演者の先生方に心よりお礼申し上げます。また論文集の発行においても先生方には非常に充実した内容の原稿をお寄せいただきました。深謝申し上げます。

学生・若手研究者によるポスター発表は 21 題ありました。一日目午後の「60 秒トーク」で各発表者に概要を紹介いただいたあと、一日目と二日目の夕刻にポスタービューイングを実施しました。各発表者の 60 秒トークがよくまとまっていたおかげかポスター会場での議論は大いに盛り上がり、設定したコアタイムが全く意味をなさないほどでした。講演者・座長の先生方の投票で学生優秀発表を 2 題選考いただいた結果、岡山大学の黒江香那さん（タバコ野火病菌の Type III effector の標的宿主因子の同定にむけた試み）と東北大学の平澤花織さん（植物ウイルスの

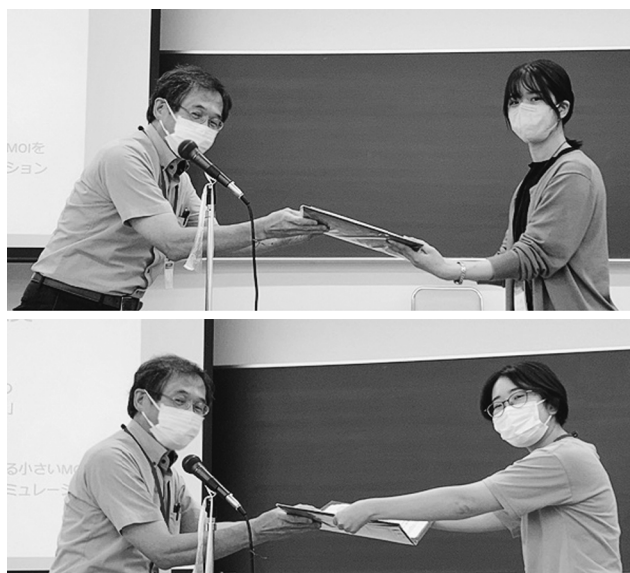


写真 2 学生優秀発表賞を受賞した黒江香那さん（上段右）と平澤花織さん（下段右）。開催地事務局代表の高橋英樹教授より賞状と記念品（こけし）が授与されました。

細胞間移行における小さい MOI を再現する細胞感染・細胞間移行シミュレーションモデルの構築）が学生優秀発表賞を受賞しました（写真 2）。おめでとうございます。お二人は研究を自分のものとして楽しんでいる様子が特に伝わってきたように感じました。ただし先生方からは「どれもいい発表で選べない…」という楽しそうな苦情(?)も来たことを申し添えます。

ところで会期の少し前、7 月から 8 月にかけて SARS-CoV-2 流行の第 7 波が来ました。一步間違えば直前にオンライン開催に変更という瀬戸際でしたが、講演者の先生方から激励を頂いたりしつつ粘りきり、何とか対面形式で開催できました。従来の合宿形式ではないものの若い学生みなさんが同世代の学生や幅広い世代の研究者と議論したり、参加者同士が楽しそうに議論する様子を見たりする機会を久しぶりに提供できたのではないかと思います。大変嬉しく思っています。一方でタイミングや規模によってはオンライン化の判断をせざるを得なかった研究会や部会もあったと聞き、鹿児島大会以来の各事務局の苦悩を思うと胸が痛みます。早くこのような状況から解放されたいものです。

さて次回の第 57 回植物感染生理談話会は、岡山大学の豊田和弘先生を代表として岡山で開催される予定です。盛会をお祈り申し上げます。（宮下脩平）

(2) EBC 研究会ワークショップ 2022

新型コロナウイルスの感染状況を鑑みて、本年度も昨年

度と同様に遠隔形式で令和4年9月12日（月）にEBC研究会ワークショップ2022を開催しました。遠隔形式での開催は2回目ですが、接続の不具合など不安な面も少なくありませんでした。ワークショップが無事に終わることができたのは、演者の方々、参加者の方々、さらに全国の当研究会の運営委員のご協力のお陰です。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。今回のワークショップの参加申込者も300名を超え、当日の講演へのアクセスは最多で230名程度でした。全国各地の職場や自宅からはもちろん、大学の教室で複数の学生さんが参加するなど参加方法も多様となりました（写真1）。多くの方々に参加いただけたことは、対面とは異なり遠隔形式は移動がなく参加しやすいという利点が発揮されたものと考えています。

ワークショップの第一部は「近年問題となっている重要病害の最新研究」として2名の先生方（新潟県病害虫防除所 石川浩司氏、青森県産業技術センターりんご研究所 赤平和也氏）、第二部は「一般化線形複合モデルの活用とその方法」として2名の先生方（農研機構植物防疫研究部門 越智直氏、群馬県農業技術センター 池田健太郎氏）、第三部は「ショートトーク ～生産現場での応用～」として3名の先生方（千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所 久保周子氏、群馬県農業技術センター 星啓佑氏、茨城県農業総合センター園芸研究所 小河原孝司氏）から講演をいただきました。参加いただいた方々からは、「データ解析の方法」や第二部で取り上げた「一般化線形複合モデル」の理解が深まったなどの感想をいただきました。さらに、総合討論後に週刊スピリッツ（小学館）で9月26日（月）から連載がスタートする『植物病理学は明日の君を願う』の作者である竹良実さんご本人から作品の紹

介をいただきました。こちらも参加いただいた方々からの反響は大きかったです。

対面と同じような熱い議論までには至らないながらも、演者と座長との連携で臨場感のある進行となり、遠隔開催も進化しています。ワークショップ後に実施したアンケートでは、各演者の講演に関して「大変に参考になった」との感想を数多くいただけたとともに、「来年度も参加したいと思いますか？」との問いに、「参加する」との回答が100%になるなど好評価をいただきました。また、今後の開催形式は、対面と遠隔とのハイブリッド形式への要望がやはり多かったです。このような回答をいただき、当研究会の運営委員も引き続きワークショップ開催への意欲が持続できます。次の開催形式については議論を重ねて、これまでの経験を活かした、さらに進化、充実したワークショップの開催を目指します。次のワークショップにも多くの方々にご参加いただきたく、どうぞよろしくお願いします。（篠原弘亮）

(3) 第21回植物病原菌類談話会

第21回植物病原菌類談話会は、オンライン開催として令和4年9月17日（土）14:00～17:00にかけて開催し、翌週9月22日（木）13:00～9月26日（月）13:00まで「見逃し配信」として参加登録者を対象に同内容を視聴できるようにした。大学、公立の試験研究機関、独立行政法人、種苗会社及び農業団体など、学生・研究者197名の参加があった。

今回の談話会は、廣岡裕吏氏（法政大学）をコーディネーターとした「フザリウム全史：分類・毒素・病原性」をテーマとして講演・質疑応答、総合討論を行った。まず初めに外側正之氏（静岡県農林環境専門職大学）が「日本における植物のフザリウム病」として、最新の日本植物病名目録にもとづく数値や自身の経験などについて日本における植物のフザリウム病害の概観を説明した。続いて、青木孝之氏（農研機構遺伝資源研究センター）が「*Fusarium* 属菌の分類の変遷～形態分類から、分子系統解析に基づく分類へ～」として *Fusarium* 属菌全体の分類について歴史の変遷、最新の種分類、また *Fusarium* 属の範囲について起きている論争を解説した。さらに須賀晴久（岐阜大学）からは「フモニシン、ジベレリン、名称の由来となったフザリウムの今は」として旧 *Fusarium moniliforme* の近年の分類について、イネばか苗病菌と菌種、フモニシンとジベレリン産生の知見と共に紹介した。浅井秀太氏（理化学研究所）からは「ゲノムから迫るフザリウムの病原性」として、*Fusarium oxysporum* の宿主特異的病原性に関わるアク



写真1 大学からの参加の様子

セサリー染色体やペアエフェクター遺伝子の発見について、最新の研究成果が紹介された。また、廣岡裕史氏（法政大学）からは「植物に発生するフザリウム病の診断を考える」として、菌の分離、同定、病原性確認において考慮すべきことを実際の病害例に則した解説があった。全ての講演が終了した後、総合討論を行い、*Fusarium oxysporum* の分化型について最新の学名との関係など、植物病原菌として *Fusarium* の分類がかかえている問題が浮き彫りにされた。次回の本談話会は分子マーカーをテーマに開催を予定している。（須賀晴久）

（4）技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナー

令和4年4月9日（土）に、オンラインで3年ぶりの技術士試験対策セミナーを開催した。学会関係者の方々には様々なご配慮をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

まず、栢森美如氏（北海道立総合研究機構 上川農業試験場）から、「技術士試験について」と題して第一次試験と第二次試験の概略と第二次試験の口頭試験のポイントを講演いただいた。次いで「技術士試験受験・合格体験」として、内橋嘉一氏（兵庫県立農林水産技術総合センター）から実際の試験問題や口頭試問内容についての解説、眞岡哲夫氏（農研機構 植物防疫研究部門）から受験の動機やモチベーションの維持、当日の心がけなどを含め、体験談をいただいた。質疑応答・総合討論では、技術士資格の活用といったことも含め活発な議論がなされた。新年度が始まったばかりの土曜日の昼の開催となったが、43名の参加を得て、盛況のうちにセミナーを終了した。なお、本セミナーで配布した資料を、これまでに開催したセミナーの資料とともに会員限定で配布している。日本植物病理学会のホームページの「技術士」の項を参照しお申込みいただきたい。

今後も、本セミナーを受講した方が技術士試験に合格し、本セミナーで講演いただくといった好循環を続けたい。技術士試験に挑戦し資格を取得することのメリットの一つとして合格者間での親密なコミュニケーションが挙げられる。一体となって受験促進と資格活用に取り組みたい。末筆となったが、参加者並びに講演者に対し、主催者一同心よりお礼を申し上げる次第である。（濱本 宏）

（5）植物病理を紡ぐ会

第5回植物病理を紡ぐ会は、植物病理学会大会前日にあたる令和4年3月26日にオンラインにて開催された（写真）。前身である『全国「若手の会」を目指して』勉強会より数えて7回目となった今回は、大学、公的研究機関、

企業から253名（学生93名）の事前参加登録を得て（約190名の同時接続を確認）、活発な質疑応答が行われ、非常に熱のこもった勉強会となった。

これまで植物病理学会のいくつかの部会では、学生・若手会員の研究交流・情報交換・交流を深める場として「若手の会」があり、活況を呈してきた。「植物病理を紡ぐ会」は、そのような場を全国大会の場でも作り、特に学生・若手会員に対して、①「現場から実験室まで」、②「基礎から応用まで」という植物病理が扱う対象の広さ、面白さに触れてもらい、③そのような植物病理学を学んだ人間の人生・将来の選択肢の広さを知ってもらうこと、さらには④業種や分野の垣根を超えた植物病理に関わる人間の異分野交流、の3点を目的として、文字通り、植物病理の「分野」と「人」を紡ぐための場として企画された。植物病理学会若手・中堅有志による自主勉強会である。本会では、植物病理の幅広い分野からの講師を招き、現在の研究や職務だけでなく、学生時代から今の研究・職務へと至る「半生史」をご紹介いただくこととしている。現在、各方面で活躍されている方々がそれぞれ人生の岐路でどんなことを考えて、どんな選択をしてこられて今に至るのか？という、いわゆる研究・職務の裏側に触れる機会というものは、若手・中堅研究者にとっては示唆に富んだ貴重な経験になるのではないかと考えている。

そのような趣旨のもと、今回は、安達広明氏（奈良先端大学）による「ナス科植物の免疫受容体ネットワークの進化と制御機構の解明に向けて」、丹羽昌信氏（ホクレン農業協同組合連合会）による「植物病理研究の幅広さ ～大地から天空へ～」、津島綾子氏（John Innes Centre, UK, 現大阪公立大学）による「植物病原真菌のゲノム情報の取得と活用」さらに、小松健氏（東京農工大学）による「箱入り研究者、「愛ある世界」を知る」という4題の講演をお願いした。まず、安達氏からは、以前所属されていた英国センズベリー研究所での研究内容を中心に、英国留学での紆余曲折も交えて紹介いただいた。サイドプロジェクトとして始めたヘルパー型の細胞内受容体NLRに着目した研究で、細胞死誘導に重要なN末端に保存されたモチーフの発見プロセスなどに触れ、「色んなプロジェクトをやってみることは、時にはプロジェクトの完遂に集中すること」の重要性について語っていた姿が印象的であった。丹羽氏からは、ホクレン入会後の現地圃場での土壌病害研究、および現在進められているドローンや衛星データを基にした技術開発や実証試験の内容について紹介いただいた。「現地との円滑な関係は何より重要」とのメッセージに加えて、普及に向けての具体的な工夫など、丹羽氏の経験に基づく

リアルな話を伺え、参加者一同農業現場への普及活動の重要性について考える機会となった。続いて津島氏からは、ゲノム解析手法について大変わかりやすく説明いただいた上で、ポストゲノム時代の圃場での応用について紹介いただいた。さらには、学位取得から英国留学に亘り、直面した悩みやそれをどの様に乗り越え、今に至ったのかについても、赤裸々に紹介いただき、特に学生・若手会員にとって、大変参考になる内容であったと感じた。そして小松氏からは、一貫して進められている植物ウイルスの病徴発現機構やウイルスの複製や多様性が生まれていく仕組みについてわかりやすく解説いただいた。また、大きな影響を受けた先生はじめ研究者との関わりについて、当時の自身の心境も交え紹介いただき、まさに本会の趣旨である「人との繋がりの大切さ」について考える機会となった。

さらに、一時代を築かれた経験豊かな講師から若手中堅へのメッセージも含めて「半生史」を語っていただきたい、という声から始めた特別講演として、今回は白石友紀氏(岡山大学 名誉教授、岡山県生物科学研究所)に「感染の成否を担う物質を追って」と題し、ご講演いただいた。ご都合により、残念ながら当日ご参加なれませんでした。ビデオ講演という形での講演となった。オオムギうどんこ病菌とエンドウ褐紋病菌を主な研究材料とし、どのようにして、受容性と拒否性の誘導機構およびそれらの誘導物質を明らかにするに至ったのかについて、大変わかりやすく説明いただいた。しっかりとした仮説や観察に基づき研究を進めることの重要性について改めて学ぶ機会となった。最後には、「世の中は解らないことに満ちている!」というタイトルで、自身の研究以外で疑問に思っている現象についていくつか紹介いただいた。今もなお、探求心を持たれている「研究者魂」に大変感銘を受けた。また、参加者から参加登録時に挙げられた質問にも一つ一つ丁寧にお答えいただいた。約1時間のビデオ講演ではあったが、全く飽きさせることなく、白石氏の力強いメッセージを参加者一同、心に刻み込むことができた。



写真 参加者一同 (一部抜粋)

以上のように、限られた時間ではあったが、多彩な講演者の研究に対する熱意および「半生史」を参加者一同共有させていただいた。本勉強会の目的の一つの異分野交流に関しては、セミナー終了後、ウェブ懇親会を行い、活発な意見交換が行われた。末筆ではあるが、週末の開催にも関わらずお集まりいただいた参加者の方々、また、多忙な時期にも関わらず(しかもボランティアで)お引き受けいただいた講演者の方々に、世話人一同心よりお礼を申し上げる次第である。(浅井秀太)

4. 技術士対応委員会

令和3年度技術士第二次試験(農業部門・植物保護)で5名が合格

令和3年度の技術士第二次試験は、令和4年3月11日に合格者が発表されました。農業部門・植物保護では以下の5名の方が合格されています。(敬称略・官報掲載順)

池田 幸子(北海道立総合研究機構道南農試; 本会会員)、
菱川(原) 涼子(茨城県鹿行農林事務所)、春日井 健司(農林水産省東海農政局)、松田 晃(山形県農業総合研究センター; 日本雑草学会会員)、野村 研(神奈川県農業技術センター; 本会会員)。

今回の合格者を合わせ、技術士第二次試験(農業部門・植物保護)の累計合格者は計153名となりました。引き続き、試験研究機関や民間企業、大学など、多様な組織から多くの方の受験をお願いします。令和4年度の技術士第一次試験は令和4年11月27日(日)に、技術士第二次試験の口述試験は、筆記試験合格者に対して令和4年12月上旬～令和5年1月中旬にかけて行われる予定です。令和5年度の受験申込・試験詳細は、日本技術士会のホームページの試験・登録情報に掲載されます。今後も多くの技術士(農業部門・植物保護)の誕生を期待しています。

(濱本 宏)

【学会活動予定】

1. 2022年度部会開催状況ならびに予定

(1) 九州部会

日時: 令和4年11月16～17日

場所: 鹿児島大学郡元キャンパス

事務局: 農研機構・九州沖縄農業研究センター

(2) 植物病害診断研究会

日時: 令和4年11月7日

場所: オンライン開催(オンライン会議ツール)

事務局: 農研機構・植物防疫研究部門

(3) 土壌伝染病談話会

日時：令和4年11月11日

場所：オンライン開催（オンライン会議ツール）

事務局：千葉大学

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

門田育生、大里修一、宮田伸一、宮本拓也、藤川貴史

編集後記

学会ニュース第100号をお届けします。本号では秋に行われた部会や研究会の報告を中心に掲載しました。

新型コロナウイルスの感染状況から、関東部会、EBC研究会ワークショップ、植物病理を紡ぐ会はWEB開催となりましたが、開催方法の工夫により活発な議論が行われました。また、技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナーはオンラインで3年ぶりに開催されました。一方、関西部会、植物病害診断教育プログラム、感染生理談話会は感染防止対策をとった上で対面形式により開催され、こちらも活発な議論や情報交換が行われました。会の開催や運営にご尽力頂いた皆様に、感謝申し上げます。

また、年末までの学会活動の主な予定を掲載しました。対面形式あるいはオンラインでの開催が予定されています。奮ってご参加いただきますようご案内申し上げます。

（門田育生）

日本植物病理学会賛助会員（ABC 順）

アグロカネショウ株式会社	307-0001 結城市結城 9511-4	0296-21-0175
アリスタライフサイエンス株式会社	103-0027 中央区日本橋 1-4-1 日本橋一丁目三井ビルディング 19 階	03-5203-9350
バイエルクロップサイエンス株式会社	100-8262 千代田区丸の内 1 丁目 6-5	03-6266-7413
BASF ジャパン株式会社	103-0022 中央区日本橋室町 3 丁目 4 番 4 号 OVOL 日本橋ビル 3 階	03-5291-3821
コルテバ・ジャパン株式会社	100-6111 千代田区永田町 2-11-1 山王パークタワー	03-3519-3243
株式会社エス・ディー・エスバイオテック	103-0004 中央区東日本橋 1-1-5 ヒューリック東日本橋ビル 3 階	03-5825-5522
ホクサン株式会社	061-1111 北広島市北の里 27-4	011-370-2103
北興化学工業株式会社	103-8341 中央区日本橋本町 1-5-4 住友不動産日本橋ビル	03-3279-5831
石原産業株式会社	525-0025 草津市西渋川 2-3-1	077-562-3574
カゴメ株式会社	329-2762 那須塩原市西富山 17 番地	0287-36-2935
科研製薬株式会社	113-8650 文京区本駒込 2-28-8 文京グリーンコートセンターオフィス	03-5977-5032
クミアイ化学工業株式会社	110-8782 台東区池之端 1-4-26	03-3822-5165
株式会社クレハ 生産・技術本部いわき事業所	974-8686 いわき市錦町落合 16	0246-63-5111
ヴィルモランみかど株式会社	298-0202 夷隅郡大多喜町下大多喜 2789-1	0470-82-2413
丸和バイオケミカル株式会社	101-0041 千代田区神田須田町 2-5-2 須田町佐志田ビル	03-5296-2313
株式会社日本医化器械製作所	543-0014 大阪市天王寺区玉造元町 3 番 9 号	06-6765-0223
日本化薬株式会社	314-0255 神栖市砂山 6	0479-40-2771

日本農薬株式会社		
104-0031	中央区京橋 1-19-8 京橋 OM ビル	03-3274-3415
一般社団法人日本植物防疫協会		
114-0015	北区中里 2-28-10	03-5980-2181
日本曹達株式会社		
100-8165	千代田区大手町 2-2-1	03-3245-6210
日産化学株式会社		
103-6119	中央区日本橋 2-5-1 日本橋高島屋三井ビルディング 18・19 階	03-4463-8330
農薬工業会		
103-0025	中央区日本橋茅場町 2-3-6 宗和ビル 4 階	03-5649-7191
OAT アグリオ株式会社		
101-0052	千代田区神田小川町 1-3-1 NBF 小川町ビルディング 8 階	03-5283-0251
大内新興化学工業株式会社		
103-0024	中央区日本橋小舟町 7-4	03-3662-6451
株式会社理研グリーン		
110-8520	台東区東上野 4-8-1 TIXTOWER UENO 8F	03-6802-8587
サンケイ化学株式会社		
891-0122	鹿児島市南栄 2-9	099-268-7588
三井化学アグロ株式会社		
103-0027	中央区日本橋 1-19-1 日本橋ビルディング	03-5290-2700
シンジェンタジャパン株式会社		
104-6021	中央区晴海 1-8-10 オフィスタワー X 21F	03-6221-3819
住友化学株式会社		
103-6020	中央区日本橋 2-7-1 東京日本橋タワー	03-5201-0281
株式会社トーホク		
321-3232	宇都宮市氷室町西原 1625	028-667-1321
協友アグリ株式会社		
103-0016	中央区日本橋小網町 6-1 山万ビル 11F	03-5645-0700
米澤化学株式会社		
601-8455	京都市南区唐橋芦辺町 14	075-681-9526
全国農業協同組合連合会		
100-6832	千代田区大手町 1-3-1 JA ビル 33 階	03-6271-8289
全国農薬協同組合		
101-0047	千代田区内神田 3-3-4	03-3254-4171
井上石灰工業株式会社		
781-0112	高知市仁井田 1641	088-847-0615

エフエムシー・ケミカルズ株式会社

100-0004 千代田区大手町 1-1-1 大手町パークビル 8 階

03-5208-1010

住化農業資材株式会社

541-0043 大阪市中央区高麗橋 4-6-17

06-6204-1139

株式会社ニッポンジーン

930-0834 富山市問屋町 2-8-16

076-451-6548

株式会社久留米原種育成会

830-0064 久留米市荒木町藤田 1422-1

0942-26-2943